創立15周年記念
日本表面科学会の歴史

草創期の学会会計にまつわる秘話

坂　田　　亮
杏林大学物理学教室　〒181　三鷹市新川 6-20-2

(1994年 8 月17日受理)

Hidden Story of SSSJ's Finance at Early Stage

Makoto SAKATA
Kyorin University, Physics
6-20-2 Shinkawa, Mitaka, Tokyo 181

(Received August 17, 1994)

学会創立から15年も経ち，時刻となっていることもあるので，学会の内幕を，会計の立場より話してみよう。

まず，結論を先にいうならば，『猛進することも，ときには必要であるが，あまりにも無謀な進み方は，その学会の存続を危くしかねない』ということである。急進派と慎重派とが互いに議論を十分に重ね，バランスのとれた学会の運営をしていくことこそ学会にとり肝要である。

どのように立派な研究があっても，それを発表し，印刷物にする場がなければ，その研究は宝の持ち腐れになりかねない。そうさせないためには，健全な財政状態の学会が必要なのである。つまり，学会において財政（会計）は非常に重要なのであって，会計理事は，常に健全財政が保たれるように目を光らせていなければならない。常任理事の多くは，少しでも良い企画をするべく，財政を無視した行動をとりたがる。特に会長は，ことさらに猛進したがる。これらに対し，財政的均衡を考え，是々非々で，しかも軽重緩急を考えて判断し，各企画の前進・停止または変更をあえて進言しつつ，学会の財政の安定を図るのが会計理事の最重要任務であろう。その，憎まれ役であるべき会計理事が，もし，他の理事に盲従するようなことがあれば，その学会は衰亡する。

さて，学会創設の昭和54年（1979年）9 月13日～55年12月の間，（故）岡田和生教授と監査を，56年 1 月～57年12月の間，金澤孝文教授と会計理事を，58年 1 月～59年12月の間，金澤教授と共に再び監査を仰せつかった。

その間に知った内幕を，いくつか話そう。ただし，紙数の都合で，話は学会草創期54～60年度の間に限る。

裏話といっても，単なる情緒的な話に惰してしまうことを避けるため，総会で発表された収支決算報告をもとにして**表 1** を作った。ここで年間損益 R とは当該年度の繰越金（a）から，未払金（b）と前受金（c）を引いたものとした。すなわち，$R = a - b - c$である。この R で 1 年間の黒字か赤字かの大要を知りうる。

54年度は，創立して半年間のみで正会員数が1,073名に急成長し，$R = +10$万円ということのみしかわからない。

55年度は350名増加し，正会員数は1,421名となった。この会員数の急増は，もちろん，表面科学に新鮮さがあり興味をもたれたためではあるが，もうひとつには，雑誌年間 2 冊で会費が2,000円という安さのせいでもあった。しかしこの会費の安さは当然のことながら収支のバランスを欠き，繰越金（a）は－12万円の赤字となった。一般の会員はこの程度の赤字は見逃してしまうであろう。しかし，実際はこれだけの赤字ではなく未払金（b）62万円，次年度会費の前受金（c）318万円があったので$R = -12 - 62 - 318 = -392$万円が実際の赤字であった。この巨額な赤字を知れば，会員は

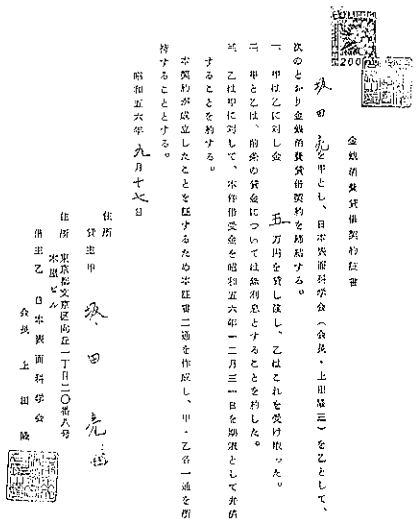
表 1　各年度ごとの会員数，収支，年間損益などの一覧表（金額の単位は万円）

年度	会員数（名，社） 正	学生	賛助	購読	収入 会費	事業	ほか	合計	支出 出版(冊)	事業	運営	合計	繰越 (a)	未収	未払 (b)	前受 (c)	年間損益 R $a-b-c$	会長
54	1073 (2000円)	—	11 (20000円)	—				173	(2)			163	+10				+10	上田
55	1421	—	29	—	394	6	27	427	87	70	292	449	−12	20	62	318	−392	上田
56	1372 (5000円)	—	38	14 (10000円)	577	315	155	1047	(4) 739	100	230	1069	−35	18	293	60	−388	上田
57	1362	—	38	15	513	652	210	1375	410	445	340	1195	+144	95	95	84	−35	上田
58	1269 (6500円)	2 (5000円)	48 (25000円)	29 (13000円)	916	377	194	1487	568	341	356	1265	+366	92	118	3	+245	清山
59	1244	7	49	36	966	539	352	1857	(5)1021	355	347	1723	+499	124	254	4	+241	清山
60	1155	6	52	37	951	659	461	2071	981	277	373	1631	+940	116	393	371	+176	清山

（注）（前年度繰越）＋（収入）－（支出）＝（本年度繰越）．会員数の下の数字は会費で，改訂されたごとに記入．金額の精度は±1 万円

驚き退会した者もあったかもしれない。これではいけないと，急きょ正会員費を5,000円に値上げすることにし，その代り雑誌を年 4 冊発行することとしたうえ，新たに購読会員（会費10,000円）を置くことにした。

56年度は，この値上げにもかかわらず繰越は－35万円の赤字であり，R ＝－388万円と相変わらずの大きな赤字であった。しかしこの大赤字にはつぎの理由があった。それは，すべての収支を清算し終わった頃，会長から急に未払の請求書が会計理事へ提示されたのである。これが大きな未払金となった理由であり，Rが巨額になった理由でもある。この巨大な赤字の圧力のもと，金澤先生と私とは毎日のように学会事務所（当時は東大正門より農学部寄りの木屋ビル 2 階）に通い，（利息のつかない）振替収入を一日も速く（利息のつく）銀行預金に移すべく，繁多なしかもはかない努力もしたことがある。また未払の印刷屋からは，期日までに送金がなければどうしてくれるなどと，おどされたこともある。われわれ会計理事二人にとって，安眠できない最悪の日々が続いた。つまり財政的に，学会は潰れる寸前にあったといえよう。そこでやむをえず，つぎの 8 人（井上　泰，上田隆三，岡田正和，荻野圭三，金澤孝文，坂田　亮，難波義捷，新居和嘉）の理事より，合計60万円を借入れることになった。このときの貸借契約証書を，その頃の歴史の証人としてつぎに示しておこう。



金銭消費貸借契約証書

坂田亮を甲とし，日本表面科学会（会長・上田隆三）を乙として，次のとおり金銭消費貸借契約を締結する。

一，甲は乙に対し金五万円を貸し渡し，乙はこれを受け取った。

二，甲と乙は，前条の貸金については無利息とすることを約した。

三，乙は甲に対して，本件借受金を昭和五六年一二月三一日を期限として弁済することを約する。

本契約が成立したことを証するため本証書二通を作成し，甲・乙各一通を保持することとする。

昭和五六年九月十七日

貸出甲　住所　坂田亮

借出乙　住所　東京都文京区向丘一丁目二〇番八号　木屋ビル　日本表面科学会　会長　上田隆三

56年度の正会員数は，値上げのほかに悪いうわさが立ち，49名の減少となり1,372名に減った。

57年度になると，正会員数は横這いであったが，非常な危機意識が働き，講座，セミナーなどのいわゆる事業収入増が懸命に図られ，出版関係も大いに節約することにより，繰越は＋144万円の黒字となった。そしてRは－35万円の赤字にとどまった。事業収入にも，出版費節約にも限度があり，このままではじり貧となることは明らかなので，それをはね返すと同時に学会活動を活発化させるために，再び会費を値上げすることにした。つまり正会員費を6,500円に，賛助会員費を25,000円に，購読会員費を13,000円にし，さらに学生会員（会費5,000円）を設けることにした。

58年度に向け，財政面再建の計画はできたが，学会運営の再建陣営はいかにすべきか。これは大問題であった。ときあたかも会長（任期 2 年）の改選期であったので，2 期 4 年間務めてきた上田会長の再選か否かが鍵となった。そして会長のこれまでの独断猛進的な行動と，金銭面でのルーズさとに，ついていけなくなっていた多くの理事は，会長の 3 選をストップさせ，清山哲郎教授を58年度の会長に選出した。この間の争いは激しいもので，理事会には怒号もとびかう終始険悪な雰囲気が満ちていた。

58年度は，清山会長のもとで，明るく民主的な学会が再生した。値上げの結果は，やはり正会員が90名減少し1,269名に減った。しかし，収入は大幅に増加し，繰越は＋366万円となり，R も＋245万円という大きな黒字となった。これは，会長が変わり，運営方針が変わり，理事の意識が変わり，会費も値上げされたことなどの総合効果によるものである。この年度になり，8 人の理事からの借入金をすべて，約束より1 年おくれたのではあるが，返却することができた。

59年度は，58年度よりの＋366万円の繰越を考慮に入れ，雑誌発行を 1 冊増し，年 5 冊（ただしこれによる会費値上げなし）にすることにした。この年度は事業収入も大幅に増加し，繰越は＋499万円，R も＋241万円の黒字となった。

60年度は，これまでの会費未納の正会員を整理するなどしたので，自然減少も含め，58年度よりは114 名減少し，1,155名となった。しかし，事業収入のほうは，純益が659－277＝382万円という大幅のものとなり，年間 5 冊雑誌を出しつつも繰越は＋940万円となり，R も＋176万円の黒字となり，学会財政もやっと安定したかに見えるようになった。しかしこれで安心できる状態ではなく，61年度以降にまた大きな危機がくるのであるが，それはつぎの機会に話そう。

最後に，中国には「井戸を掘った人の恩を忘れるな」という諺がある。その意味で，この表面科学会を創立した初代会長（故）上田隆三教授の功績は偉大であり，いろいろのこともあったが，その功績を決して忘れてはいけないということを申し添えて，先生の冥福をここに祈る。